

アメリカから帰って

津守 眞
(保育研究者)

この文章は、著者及び出版社の承諾を得て、津守眞著『私が保育学を志した頃』（ななみ書房 二〇一二年）より一部転載（p.306-314）したものです。―編集委員会―

アメリカから帰って

昭和二八（一九五三）年八月、私のアメリカの旅は終わった。

アメリカから帰って直ぐ、私達は結婚することを宣言した。双方の家族も、二年近い二人の別離を思つて協力してくれた。暑い八月に帰国後、十日程で結婚式をした。母の誕生日だった。その後私鉄沿線の商店街のアパートの一室に住むことになったが、当時としては恵まれたことであつた。

一年十か月の間に、日本の社会は変化していた。

帰国して私が第一に驚いたのは、「道徳教育」という語が頻繁に聞かれたことだった。いまでは殆ど信じられないかもしれないが、戦争が終わつた直後から一九五一年の頃までは、教

育界でこの語を聞くことは殆どなかった。そのくらい戦時中の道徳は新しい枠組みの中で考え直さねばならないと一般に思われていた。小学校では教科書も墨で塗りつぶし、教育勅語を暗唱することもなくなった。国家を中心とした忠君愛国の道徳とは違う、人間的で普遍的な価値観を人々は探っていたが、新しい言葉が見つからないうちに古い言葉が登場してきたという印象を私はもった。それは早くも日本の右傾化を暗示するように思われた。

第二に驚いたのは、「保育要領」に代わって「幼稚園教育要領」（案）が力をもっていたことだった。「保育要領」は幼児の生活に即したものだだったから、保育現場では使いやすいものだった。それに対して「幼稚園教育要領」は、目標の羅列で、一見してそこから幼児の生活は見えてこなかった。そのうえ私に疑問だったのは、文部省が定めたものが幼児教育の根拠となるという考え方であった。コメニウス、ペスタロッチ、フレーベルの幼児教育思想、さらにその後の進歩主義教育の歴史はどう関連するのかということだった。保育要領は米国の教育使節団のヘレン・ヘフナン女史に負うところが大きいが、彼女は米国の進歩主義教育の全盛期を生きた人である。いま『文部省幼稚園90年史』（一九六九年 一九六頁）を参照して見ると、「一九五二年、わが国の独立を契機として高まった教育の全面的な再検討の機運とあいまって、一九五六年二月に保育要領が改訂されて幼稚園教育要領となった」と記されている。一九五二年というところとちょうど私がアメリカ留学中のことである。こうしてみると、この時期が日本全体の右傾化の発端をなしているようである。

帰国したばかりの私は、多くの人からアメリカの最先端の研究を尋ねられたが、私にとつてはこの二つがいつまでも消えずに心に留まった。

● Dr. デール・B・ハリス教授の来日

アメリカから帰って直ぐに私はお茶の水女子大学に講師として復職した。

附属幼稚園で私が毎日見ていた、幼児が一日中遊ぶ姿の中に幼児教育があるという考えは、帰国して後も少しも変わらなかった。心理学者としてその続きをどうするかということが私の課題だった。附属幼稚園の中に家政学部児童学科の研究室があつて、私は、毎日子どもたちの遊びとそれを生み出す保育を眼前にしながら、心理学はどのように貢献できるかを考えた。それを探って実に長い年月を経ることになった。

アメリカの進歩主義教育協会は私がアメリカから帰って二年後の一九五五年に解散された。アメリカから届く心理学の新しいジャーナルは、子どもの活動を中断して遊びの実験場面をつくり、教育効果のあがるプログラムを作ろうとする研究が主流だった。アメリカも変化しつつあった。

私がミネソタ大学を去って間もなく、それまでミネソタ大学に直属の独立児童研究所が教育学部付属研究所となり、名前も Institute of Child Welfare から Institute of Child Development (児童発達研究所) と改められた。内容も大幅に変わり、それまで大きな部分を占めていた両親教育部門は廃止された。そのことを、ハリス先生は非常に残念がっておられた。改組にあたってハリス先生は数年間非常な苦勞をされ、ミネソタ大学を去ってペンシルヴァニア州立大学に移られた。一九六八〜一九六九年(昭和四三〜四四年)に、お茶の水女子大学は、Dr. デール・B・ハリス教授をフルブライト教授として招いた。ハリス先生夫妻は小石川植物園のそばのマンションの一室に半年にわたって滞在され、児童学科のために講義を

して下さった。ハリス先生はお茶の水女子大学附属幼稚園を見て、自分はノスタルジアを感じると言われた。先生はミネソタでの私の修士論文を覚えておられて、最近に出版されたクレミンの『学校の変貌—アメリカの進歩主義教育一八七六—一九五七』(The Transformation of the School-Progressivism in American Education-1876-1957 Vintage Books, New York 1961)をお土産に持って来て下さった。アメリカではプログラム教育が盛んで、ハリス先生はそれに対して批判的だった。先生は児童学科のことを Institute of Child Study と呼ばれた。半年の講義の最後に「米国における幼児教育の最近の動向」と「幼児教育理論のための心理学的基礎」を特別講義として加えられた。(デール・B・ハリス、津守眞『児童発達教育学』(光生館 一九七一年)に載せてある。)

一九七〇年前後、私は自分の子どもたちの長期にわたる描画の研究を契機として、ようやく自分の学問的苦悩から脱出しつつあった。

児童心理学から保育学の学徒へ

人は壮年期に、自らの心の底の願いと現実に行われていることとの間に食い違いを体験し、その溝を埋めるべく戦う。一九六〇年代、一九七〇年代、幼児の発達と保育を専門としていた私は、自分が訓練を受けてきた実証科学の思考法と保育の実際との間に大きな食い違いを感じていた。私が子どもとの間で最も重要と思ったものが科学の網の目からこぼれ落ちていた。私が子どもの描画の研究からこのことを明瞭に意識したのは一九七〇年前後であった。東京で、ワシントンで、スウェーデンでの国際学会で、ひろく外国の学者と議論することができた。オランダユトレヒト大学のフェルメール先生も私の描画の研究に関心を寄せて励ま

してくださった。この当時、私はルードウィッヒ・クラークスの「生命過程と精神」について考えていたが、フェルメール先生がクラークスを人間学の源流に位置づけておられることを心強く思った。(注 フェルメール先生の恩師であるランゲフェルト先生も後に来日された。それらについてはミネルヴァ書房『発達』88号に詳しい。) 人間科学には自然科学とは異なる視点が必要なこと、それは世界に共通の現代の学問の課題であることを知った。

その時期、私は日々のノートを新しくし、変化して行く自らの考えの過程を記録しようと考えた。

一九七二年十月二十六日の日記には次のように記している。

いまや私が歩んできたもののなかから、またいままでの思考法のなかから、合理主義というか、保育を考えるのに不毛であった思考の残滓をすべて捨てて出発すべき時が来たようだ。子どもとかかわりつつ現象としてみることに、意味をさぐる反省的思考など、思い切って保育研究の転回をしよう。

一九七二年十月三十日

障碍をもつ幼児を幼稚園に入れることの是非を議論する大学の委員会があった。多くの委員が障碍をもつ子どもを園に入れることに原則的には反対しないが、それに伴う先生の負担、施設の改修の必要、人手の不足、他の子どもに及ぼすマイナスの点を考えねばならないという主張をした。病院でも内科の患者と外科の患者とはおのずから異なるところで処置せねばならぬという発言もあった。要するに障碍をもつ幼児を普通の幼稚園に入れることはできないとの結論である。この奥に感じられるのは、人を科学的思考で分断する力である。人と人

との間を分断するのは悪魔（ラテン語で *diabolos* という、人と人との間に何かを投げるという意味）である。私共の常識的考え方の中には悪魔がいる。だが同時に私共には真実に向かう天が備えられている。

一九七二年十一月五日

●子どもと共なる人生をふりかえる

日曜日の午後一杯、私は考えこんで何もしないで過ごした。子どもたちは風呂に入り、台所からは妻が焼き鳥を焼くにおいが流れてくる。

子どもがたずねる。「お父さん クリスマスプレゼントにもらいきれないほど もらったらどうする?」「家を建てかえるかな」と私は何気なく答える。子どもがピアノをとぎれとぎれにひく。森有正は、『バビロンの流れのほとりにて』の中で、「人は孤独な運命のなかに自分をおくことによつて思索する」というが、保育者は孤独とは縁遠い生活の中で思索せねばならぬ。過去十数年にわたつて、私のまわりには家庭でも大学でも、常に子どもたちがいた。私は常に子どもたちの要求に追われて過ごし、そのなかで保育の本質を見い出そうとつとめてきた。だが、その最中に、幼児の専門家として私がとつた学問の方法は外面的観察を主とする当世風であった。重要なものはぼろぼろと腕の下から抜け落ちていた。いまその本質にいくらかふれる道を見出した。私なりに学問の思考法が転回した。その新しい目で資料を見直し、学問化することのできる時ではないか。

子どもの弾くピアノはかなり流暢になった。「ごはんができました」と妻が言う。私はこうして書いている。そんな時間がいま与えられるようになったのだ。孤独ではない運命の十年。

それを考えることのできる時。いずれも私に与えられた時である。

一九七三年七月十八日 夢とその考察

一昨夜の夢

「木の根を掘り起こすと、やぶからしの太い根が木の根にからみついて、どちらが本物の根か分からぬほどである（やぶからしは、蔓性の植物である）。私は、その根を手でときほぐす。これではいままに地上の植物はすべてやぶからしになってしまうのではないかと思う」。

昨夜の夢

「私は何か自分の研究の報告をする。そのあとだれか保育現場の人の声がして『この研究には生命がない』と言う。私は憤慢を感じながら、それも本当なのかもしれないと思う」。

私は長い間、どこかに絶対的な知識の体系があつて、それを発見しあるいは、それを作り上げることに参加するのが学問であると思つていた。はつきりとそのように意識していたわけではないし、部分的にはその逆も考えてはいたが、どこかに右のような前提があつたと思う。しかし、少なくとも、子どもと人間に関する学問の分野では、そういう絶対的な知識の体系や法則があるのでなく、それを見い出すことが学問の課題であるのでもない。もしもそうだとしたら、それを見い出した人は、それを他の人に教え、それに従つて考えることが保育者の課題となる。そうではない。

人間の心という未知なる世界が広がつており、私はそれにふれて、自分にとつての意味を見い出すのである。子どもの行動にふれて、それは私にとつて意味のあるものとなる。私は

そのこのの意味を何度も発見し直し、子どものひとつの行動の分かり方が、自分にとってより根源的本質的なものにふれ、かつ、多面的になってゆくのである。

保育を教えるということは同型のものを作り出すことではない。相手が、その人なりに子どものことがよくわかるようになってゆくきっかけとなるのである。

このことを、きょうは、学生さんのレポートを一日ゆつくりと見ていて、自分なりに考えた。他人の体験を読み、またはひもどくとき、そのことから自分なりに考えることができる。その人と同じところで体験したならば、聞くだけでは違ったように考えることができるであろう。また、他の人が、その人の体験をその人なりに根源にふれて、いろいろの面から考えたことを聞くことは、自分が自分なりに考えて行くのにためになる。それが教えるということのはたらきである。

注

デール・B・ハリス先生は、津守のアメリカ留学先（ミネソタ州立大学児童研究所大学院）における指導教官であるが、初めて会った時（一九五一年）のエピソードが次のように書かれている（『私が保育学を志した頃』p.89）。

「当時先生は40代はじめてで、児童研究所の所長になったばかりだった。秘書のメアリーは、ハリス先生は学生の間で一番人気のある教授だと教えてくれた。握手をするとすぐに、先生は友人の原子物理学者に言及し、彼は広島原子爆弾で良心を責められて神経を病んでいると話された。そして申し訳ないと私に謝られた。私はアメリカの学者にこういう人がいることに心を打たれた。」